

第四十節の隠された歴史——第三十番

エゼキエル 第十一番号

Jeff Pippenger

2026-09-02

エゼキエル書において、エルサレムの「包囲」は、獣の像の形成を示すものであり、それゆえ、私たちの永遠の運命がそれによって決定される試金石たる「しるし」である。

「主は、恵みの期間が閉じる前に獣の像が形成されることを、わたしに明確にお示しになった。というのは、それが神の民に対する大いなる試験となり、それによって彼らの永遠の運命が決せられるからである。…」

「これこそ、神の民が封印を受ける前に必ず受けなければならない試練である。神の律法を守り、偽りの安息日を受け入れることを拒むことによって神への忠誠を証明した者はみな、主なる神エホバの旗の下に列し、生ける神の印を受けるであろう。天来の真理を手放し、日曜日安息日を受け入れる者は、獣の刻印を受けるであろう。」『Manuscript Releases』第15巻、15。

ケスティウスの「しるし」によってエルサレムから逃れたキリスト者たちは、あらかじめ警告を受けており、その「しるし」が到来したときにそれを見分けたがゆえに、そうしたのである。獣の像の形成を認識するとは、日曜法へと導く「出来事」「準備」および「動き」を認識することである。その「しるし」を構成する預言的要素は、そのしるしに先立って理解されていなければならない。ケスティウスが包囲を開始した時には、そのしるしが何であるかを学ぶには、すでに手遅れであった。

「すでに準備は進められており、また、獣にその像を造る結果となる諸運動が進行中である。地上の歴史において、これら終わりの日のための預言の予告を成就させる出来事が引き起こされるであろう。」Review and Herald, April 23, 1889.

備え、動き、そして出来事

「準備」、「動き」、および「諸出来事」は、その試練に先立ってあらかじめ認識されなければならない。

「神が預言的歴史のうちにおいて過去に成就されるべきものとして明示されたことは、ことごとくそのとおりになってきた。そして、なお将来に属するすべてのことも、その定められた順序に従って成るであろう。神の預言者ダニエルは、その持ち場に立っている。ヨハネもまた、その持ち場に立っている。黙示録において、ユダ族の獅子は預言を学ぶ者たちにダニエル書を開示されたのであり、このようにしてダニエルはその持ち場に立っているのである。彼はその証しを担っている。すなわち、主が彼に幻のうちに示された、偉大にして厳粛な諸事件についての証しであり、これらの出来事は、その成就のまさに敷居に立っているわたしたちが知らなければならないものである。」

「歴史と預言において、神の御言葉は、真理と誤謬との長く継続してきた闘争を描いている。その闘争はなお進行中である。かつてあったことは、再び繰り返されるであろう。」『セレクトッド・メッセージズ』第2巻、109頁。

私たちは、「その成就のまさに敷居に立っている以上」、それらの「大いなる厳粛な出来事を知っていなければならない」。この「敷居」という語は、それらの出来事が成就する前に、あらかじめそれを理解しておく必要があることを示している。

「しかし、預言の筆による厳然たる線描は、この平和な光景に変化が生じることを明らかにしている。小羊のような角を持つ獣は竜の声をもって語り、『先の獣のすべての権力をその前で行使する。』異教主義と教皇制に現れた迫害の精神が、再び現されるのである。預言は、この権力が『地に住む者たちに、獣の像を造るように』言うであろうと宣言している。〔黙示録 13:14〕その像は、第一の獣、すなわち豹のような獣に対して造られるのであり、これこそ第三天使の使命の中に示されているものである。この第一の獣はローマ教会を表している。すなわち、市民権力を帯び、あらゆる異議申立てをする者を処罰する権威を有する教会的団体である。獣の像は、これと同様の権力を帯びた別の宗教的団体を表している。この像の形成は、その平和的な興りと穏やかな表明とによって、合衆国のきわめて顕著な象徴となっているあの獣の働きである。ここに、教皇制の像が見いだされるのである。わが国の諸教会が、彼らに共通して保持されている信仰上の諸点において一致し、その布告を執行し、その制度を支持するよう国家に影響を及ぼすとき、そのときプロテスタント・アメリカはローマ教階制の像を形成したことになる。そのとき、真の教会は、神の古代の民がそうであったように、迫害によって攻撃されるであろう。ほとんどあらゆる世紀が、教会と国家の権利を保護することによって神に仕えているという口実のもとに、偏狭と悪意が何をなし得るかの実例を提供している。ローマの歩みに従い、この世の権力と同盟を結んだプロテスタント諸教会は、良心の自由を制限しようとする同様の願望を示してきた。十七世紀には、何千人もの非国教徒の牧師たちが、イングランド国教会の支配のもとで苦しみを受けた。世俗政府が宗教をえこひいきするとき、迫害は常にそれに続く。」『Spirit of Prophecy』第4巻、277。

獣の像の形成は、まず合衆国において成し遂げられ、その後、世界において成し遂げられる。

「諸外国は合衆国の模範に従うであろう。彼女が先頭に立つとはいえ、同じ危機が世界のあらゆる地域にいるわれわれの民の上に臨むであろう。」『証の書』第6巻、395頁。

313年のミラノ勅令は、その形成の開始を示すものであり、また第七日安息日再臨信徒にとっての閉ざされた門をも特定する。西方のコンスタンティヌスと東方のリキニウスは、この勅令に条約結婚を結び付けた。すなわち、コンスタンティヌスが自らの異母妹コンスタンティアをリキニウスに与えたのであり、これは、ダニエル書11章の預言的歴史における六つの条約結婚の預言的系譜の中で表される第四の条約結婚であった。最初の二つは北と南の間の戦争に関連しており、次の二つは東西の間の内戦であり、最後の二つは教皇制教会権力と国家権力の象徴的結婚である。

アンティオコス二世テオスは、紀元前252年ごろ、プトレマイオス朝の王女ベレニケ（プトレマイオス二世の娘）と結婚するため、自らの妻ラオディケー世を退けた。セレウコス朝における条約結婚は北の王と南の王との間で成立したが、これに対して、313年の条約結婚は東の皇帝と西の皇帝との間でなされた。

紀元前252年におけるアンティオコス二世テオスの条約婚は、ダニエル11章10節から16節に表されている歴史において、一帝国としての終結に至るセレウコス帝国の始まりを示していた。セレウコス帝国の最後の歴史において、もう一つの条約婚が大アンティオコス三世によって成し遂げられた。すなわち彼は、紀元前193年に、自らの娘クレオパトラ一世シラ（預言の歴史におけるまさに最初のクレオパトラ）をプトレマイオス五世に与えたのである。その時、プトレマイオス五世はおよそ16歳、クレオパトラ一世シラはおよそ10歳であった。彼らの結婚は、第五次シリア戦争の後の外交的和解であった。ダニエル11章における北の王と南の王との間のアルファの条約婚は、第二次シリア戦争の終結を画していた。

預言的歴史における最後のクレオパトラは、ユリウス・カエサルとも関わり、その後さらにマルクス・アントニウスとも関わった。紀元前44年にユリウス・カエサルが暗殺された後、紀元前43年に第二回三頭政治が成立した。この三頭政治は三人の人物によって構成されていたが、そのうちの一人、マルクス・レピドゥスがオクタウィアヌスによってその三者の同盟から排除された後、東方のマルクス・アントニウスと西方のオクタウィアヌスとの間で権力闘争が生じた。紀元前40年、ブルンディシウムにおいて、この東西の二人の対立者の間で条約が結ばれた。その条約には、オクタウィアヌスの妹オクタウィアとマルクス・アントニウスとの結婚が含まれていた。条約も、それに伴う結婚も維持されず、マルクス・アントニウスはクレオパトラと関係を持つようになった後、紀元前32年にオクタウィアと離婚した。紀元前31年のアクティウムの戦いにおいて、東西の帝国は一つの権力の下に統合され、その後オクタウィアヌスはアウグストゥス・カエサルとなり、ローマの栄光と権力の絶頂の象徴となった。

預言的に言えば、ダニエル書十一章における最初の条約結婚は、アレクサンドロス大王の帝国を再建しようとして争っていた二人の交戦者の敵対関係を終わらせようとする試みにおいて、北の王と南の王との間で結ばれたものであった。セレウコス朝とエジプトのプトレマイオス朝との間のその最初の条約結婚は、セレウコス王国とプトレマイオス王国におけるアルファの条約結婚であり、同じ二つの勢力の間におけるオメガの条約結婚を予型していた。最後の、すなわちオメガの条約結婚においては、エジプト史上まさに最初の、すなわちアルファのクレオパトラが、最後の、すなわちオメガのクレオパトラへの預言的な連結となった。彼女とマルクス・アントニウスとの関係は、オクタウィアとマルクス・アントニウスの離婚の参照点となった。その離婚は、東のマルクス・アントニウスと西のオクタウィアヌスとの間の敵対関係の再燃を画し、それは紀元前31年のアクティウムの戦いにおいて終結した。

紀元前40年のブルンディシウムにおける条約結婚は、東西の闘争におけるアルファの条約結婚であり、それはちょうどラオディケーとアンティオコス二世テオスの条約結婚が南北の闘争におけるアルファであったのと同様である。313年の条約結婚は、マルクス・アントニウスとオクタウィアのアルファの条約結婚に対するオメガであり、それはちょう

どプトレマイオス五世とクレオパトラ一世シラとの条約結婚が北と南の王国におけるオメガの条約結婚であったのと同様である。313年のオメガの条約結婚へと導いた三つの条約結婚は、すべて互いに対応しており、ミラノ勅令に結び付けられた預言的特徴に対する三人の証人を提供する。これらを合わせると、東、西、北、南の四つの文字どおりの条約結婚は、教皇制の二つの象徴的条約結婚と対応している。

496年、フランク王クローヴィスはクロティルダと結婚していた。クロティルダはブルグントの王女であり、ブルグント王キルペリク2世の娘であった。父と母が一族内の権力闘争の中で殺害された後、彼女は叔父の庇護のもとで暮らし、そののち493年にフランク王クローヴィス1世に嫁がされた。彼女はカトリック信徒であり、すなわちローマ教会のニカイア信条／正統信仰を保持していた。これにより彼女は、当時アリウス派キリスト者であった他の多くのゲルマン系王族家門とは一線を画していた。彼女の母カレテナもカトリック信徒であり、クロティルダはその信仰の中で育てられた。彼女は、クローヴィスに異教を捨ててカトリックの洗礼を受けるよう粘り強く勧め続けたことで記憶されており、その結果としての496年における彼の回心は、フランスおよび西方のいわゆるキリスト教の初期の歴史における最も重要な出来事の一つである。

クローヴィスは、もしトルビアクの戦いに勝利するなら、クロティルダのカトリック信仰に改宗し、洗礼を受けることを誓った。アレマンニ王は殺され、その軍勢は崩壊し、フランク人は勝利した。勝利ののち、クロティルダはランスの司教レミギウスにクローヴィスを教え導くよう取り計らい、彼は（伝承によれば496年のクリスマスの日に）数千人の配下の戦士たちとともに洗礼を受けた。

クローヴィスはフランク族の王であり、現代の表現で言えばフランス王である。彼は、最終的にその異教の宗教を放棄してカトリックへと転じることになるヨーロッパの諸王のうち、最初の王となった。このゆえに、クローヴィスは「カトリック教会の長子」とみなされ、フランスは「カトリック教会の長女」と呼ばれている。1980年、教皇ヨハネ・パウロ二世がフランスを訪れた際、彼はこう問いかけた。「教会の長女フランスよ、あなたは自らの洗礼に忠実であるか。」

クローヴィスのニカイア・カトリックへの改宗は、538年の象徴的な条約婚姻へと至る象徴的な婚礼行列の始まりを示している。クローヴィスと、地の王たちと姦淫を行う淫婦との間の象徴的な条約婚姻は、ダニエル書十一章における先行する四つの条約婚姻によって予型されていた。クローヴィスは、ローマ教会に軍事のおよび経済的支援を提供した最初のヨーロッパの王であり、それゆえクローヴィスはダニエル書十一章の歴史の中に表されている。

また彼の側には軍勢が立ち上がり、彼らは力の聖所を汚し、常供の燔祭を取り去り、荒らす憎むべきものを据える。ダニエル 11:31。

496年のクローヴィスは、教皇権が権力を増し加えるに際してそれを助けるために、ヨーロッパの政治的諸構造が「立ち上がる」ことの始まりを画する。それはまた、象徴的な婚礼の行列の始まりを画する。この節の「武力」は、さらに「力の聖所」をも汚すことになるが、それは異教ローマと教皇制ローマの双方にとって、ローマの都そのものである。

二つの聖所

ダニエル書には、「聖所」と訳される二つの異なるヘブライ語がある。すなわち、ヘブライ語の「miqdash」と「qodesh」はいずれも「聖所」と訳されるが、qodeshはただ聖なるもののみを表し得るのに対し、miqdashは文脈によって、聖なる聖所をも、聖ならざる聖所をも表し得る。

三十一節における「力の聖所」は「ミクダーシュ (miqdash)」であり、ローマの力の聖所を表している。異教ローマにとっても教皇制ローマにとっても、それはローマの都であった。オクタウィアヌスが帝国を統一したアクティウムの戦い以来、異教ローマはダニエル書十一章二十四節の成就として、三百六十年（一時）の間、無敵であった。

彼は安らかに州の最も肥沃な地にまで入り、彼の父祖たちも、その父祖たちも行わなかったことを行い、彼らの間に分捕り物と略奪物と富とを分け与える。また彼は要塞に敵対してその策略をめぐらすが、それもただしばらくの間である。ダニエル 11:24.

異教ローマがローマ市から支配していたとき、それは無敵であった。しかし、コンスタンティヌスが330年に首都をコンスタンティノーブルへ移したとき、第24節の「時」は成就した。ダニエル書第7章における三つの角の最後の一つ（ゴート族）が都から追い出されたとき、教皇制ローマは預言的に、538年に聖書預言の第五の王国として王座に就いた。ゴート族はローマを包囲していたが、最終的には、ユスティニアヌスに仕えた将軍ベリサリウスが都を確保したため、退却した。その後、ローマ教会は1260年の間、至高の支配権を有したが、1798年にナポレオンが教皇を追放して流刑に処した。

ローマ、「力の聖所」は、「汚された」（ここで「汚された」とは「傷つけられ、あるいは崩壊させられた」という意味である）。それは、その都に対する継続的な戦争から出た「軍勢」によってであり、その戦争は主として『黙示録』第八章の最初の四つのラッパによって表されている。

496年以後に続いた歴史において、ローマの都は、ローマ帝国の権勢と栄光からローマ・カトリック帝国の権勢と栄光へと移り変わるにつれて、汚されることとなった。その軍勢は、ニカイア派カトリックの宗教を受け入れることによって、この箇所での「日ごとのもの」という語によって表されている異教の宗教を取り除くのである。

ヴィエの戦いにおいて、クローヴィスはアラリック二世に率いられたアリウス派の西ゴート人を打ち破り、アキテーヌを獲得した。この勝利の余波の中で、508年、東方皇帝アナスタシウス一世（コンスタンティノーブル在位）は、西ゴート人に対する勝利をたたえてクローヴィスに栄誉を与えた。トゥールのグレゴリウスによれば、アナスタシウスはクローヴィスを執政官とする公式文書を送った。トゥールの聖マルティヌス教会において、クローヴィスは紫のチュニックと外套をまとい、頭に王冠を載せ、馬に乗って進み出て、群衆に金銀を撒いた。グレゴリウスは、その日以来、彼は執政官として歓呼され、クローヴィスが西方における正統なキリスト教王であることがローマ皇帝によって承認されたと述べている。彼は、コンスタンティノーブルもまた敵対していたアリウス派の西ゴート人を打ち破ったことに対して報われたのである。508年とは、東方の皇帝がカトリックのフランク王を公に顕彰した年であり、教会、勝利、そしてローマ的正統性が一つの

場面において結び合わされた年である。508年とは、アリウス派西ゴート人の支配を打ち破った後、フランクのカトリック王国がガリアにおける支配的なカトリック勢力として立った年である。クロヴィスは、アリウス派諸王国に対抗してニカイア信条に基づくカトリック信仰のために戦った最初の主要な蛮族の王であり、それゆえ「教会の長女」としてのフランスの役割の原型である。クロヴィスは496年から508年に至る時期を表しており、象徴的な婚姻条約のアルファの象徴である。508年から538年に至る三十年間はユスティニアヌスによって表され、彼はその進行のオメガの象徴である。

538年、「腕」は1260年間、教皇権を地上の王座に就かせた。その時こそ、496年に始まっていた婚礼の行列の終結において、象徴的な条約結婚が成就したのである。1798年、ローマ教皇とフランスのクロヴィスとの間に始まっていたその条約結婚は、フランスのナポレオンが自らの将軍に教皇を捕囚とさせることによって教皇権を離縁した時、破棄された。

496年に婚礼の行列を開始したアルファ的・象徴的な教皇条約婚姻は、538年の日曜法において成就され、その後、ダニエル書十一章における他のすべての条約婚姻と同様に、1798年において解消された。黙示録は、ヨーロッパの王たちとカトリックの教皇たちとの間の教皇的婚姻関係にさらに付け加えている。というのも、黙示録十二章の竜は、サタンであると同時に、異教ローマの王たちでもあるからである。

「したがって、竜は第一義的にはサタンを表すが、第二義的な意味においては、異教ローマの象徴である。」『各時代の争闘』439頁。

黙示録において、ヨハネは、王たち（竜）がカトリシズムの海の獣に三つのものを与えたことを、私たちに告げている。

また、わたしの見たその獣は豹に似ており、その足は熊の足のようであり、その口は獅子の口のようにであった。さらに、竜はその獣に、自分の力と位と大いなる権威とを与えた。黙示録 13:2

496年に、ヨーロッパの王たちは、その軍事力と経済的支援によって象徴される自らの「力」を教皇制の獣に与え始めた。彼らは330年に自らの帝国の首都をコンスタンティノープルへ移し、その結果、ローマの町は教皇権の「座」として残された。その後、「武力」は、533年のユスティニアヌスの勅令によって、教皇教会をすべての教会の首長として位置づけた。その勅令には、教皇権が異端者と認定した者たちを迫害するために彼らの軍事力を用いることが含まれており、それによって彼らの市民的「権威」は教皇たちの手に委ねられた。

教皇制とヨーロッパの王たちとの間のアルファの条約的婚姻は、496年にクロヴィスによって始まった。508年までには、その国の法定宗教であった異教は退けられ、ニカイア・カトリックの宗教がそれにとって代わった。533年、ユスティニアヌスは教皇制をすべての教会の首位であると認め、それぞれの王座に属する法的権威を教皇権力に委ねた。

アルファでありオメガである座

330年、ローマの都はローマ教会の手に委ねられ、彼女はキリストの再臨の際に火の池で滅ぼされるまで、そこに座することになった。538年、彼女は教皇の王座に再び正式に着座し、それによって330年から538年までの歴史は、アルファの座で始まりオメガの座で終わる預言的期間として特定される。この期間は、聖書預言における第四の王国（ペルガモ）の終焉を表しており、それは330年に始まり、テアティラの到来とともに538年に終わる漸進的な衰亡である。西ローマと東ローマの双方は538年以後もなお緩慢な解体を続けたが、この期間は、330年にローマの都を表す座が教皇権に与えられたことによって始まり、その座は538年には、単にその都を支配する王座ではなく、その都によって表象される王国を支配する王座となったのである。

330年から538年は、教皇制の権力付与における「八つ」の道標を規定する特定の預言的期間である。その八つの段階は、ほどなく到来する日曜法において教皇制の致命的な傷が癒やされる際に、繰り返される。

八つの段階の第一は、ローマ市が教皇権に与えられたことであり、第八の段階は、その都が聖書預言における第五の王国の王座として与えられたことであった。これによって、538年がその座であり、かつ「前の七つの段階に属する第八の段階」であることが示される。第一の段階は座が与えられることであり、第八の段階も座が与えられることであった。したがって、330年における第一の段階がアルファであり、538年がオメガである。二つの座、除かれた三つの角、取り去られた日々の務め、クローヴィスの改宗、そしてユスティニアヌスの勅令、これらが合計八つの段階を成し、婚礼の行列を、そして究極的には婚礼そのものを示している。

1798年に、538年に教皇権を王座に据えた、十人のヨーロッパの王たちを代表していた勢力であるフランスは、そのまさに同じ王座から教皇権を引きずり下ろした。538年から1798年に至る歴史に表されたアルファの条約結婚は、黙示録第17章の十人の王たちと教皇権とのオメガの条約結婚を予表している。496年から538年に至る婚礼の行列は、アメリカ合衆国の最後の八人の大統領と符合する八つの段階を予表している。クローヴィスとフランスは、十人のヨーロッパの王たちの象徴である。彼らは、まもなく到来する日曜法において、黙示録第17章の十人の王たちの筆頭の王となるアメリカ合衆国を表している。

ダニエル書第十一章における先の五つの条約婚姻は、終わりの日における第六にして最後の条約婚姻と一致している。北と南のアルファとオメガの条約婚姻は、南から来る花嫁をアルファとして示し、オメガは北から来る花嫁である。異教ローマの条約婚姻においては、東からのアルファの花嫁が西に与えられ、また西暦313年のオメガは西からの花嫁であった。これら四つの婚姻は、第一のクレオパトラと最後のクレオパトラによって、預言的に互いに結び合わされている。教皇制ローマの象徴的条約婚姻は、花婿を、十人の王から成る預言的同盟の首位の王として、その花嫁——ローマの緋色の女——と結び合う者として表していた。離縁は、1798年に、その十人の王の首位の王によって遂行された。

313年の条約結婚は、黙示録第十七章の十人の王のうち第一の王であるアメリカ合衆国との、教皇権力の最後の条約結婚を表している。すなわち、それはフランスの二本の角を持つ勢力によって予型される、二本の角を持つ勢力である。496年のクローヴィスに始まり、ついには533年のユスティニアヌスの勅令と538年の教皇権の即位へと至った歴史は、1

989年から日曜休業令に至るまでの歴史を表している.

これらのことについては、次の記事で引き続き扱うことにする.